

精神的変化を連想させる英語他動詞群の意味分析

ITO, Koichi / 伊藤, 幸一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

1984-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005505>

精神的变化を連想させる英語他動詞群の意味分析

伊 藤 幸 一

はじめに

日頃の穏やかな精神状態に変化をもたらす場合だけでなく常態に戻すことも含めて、精神的变化を生じさせる意の他動詞が分析の対象となる。構造的意味論にとって基礎的な意味場として意義があると考えられる。

文法的共通性も顕著に見出され興味をそそる。使役動詞にしかるべき形容詞、名詞、自動詞を付加することでパラフレーズされるにもかかわらず他動詞一語で存在することに起因するのであろうか。

結果志向型の他動詞表現で、分析していくと内的世界には穏やかな状態の他にどのような状態が外界からもたらされるのか分かるので、それにかかわる感情の意味場の構造分析をしていることになる。結果としてもたらされる状態は、変化する前と比較して不快になる場合と、快になる場合とに大きくふたつに分類されるように思える。

この快・不快ということが共通点なのだろうか、LOVE・LIKE あるいはHATE・DISLIKE などを中心とする意味場と混同されることがある。一方は、当然本人の感受性が問題となる感情ではあるが、外界の刺激に起因し、他方は外界の刺激によって形成されるのであろうが、自己の内なる感情の吐露である。近接していて一部因果関係も見出されるが、まずは別途に論じるべきであると考えられる。

各語彙間の差異は、下位範疇では程度であることが多いようだが内的世界のことなので測り知れない。外的に現われ、つまり表情や行動に注意することで理解されることもある。知識量に左右されたり、肉体的なことが精神的に影響することも見て取れる。感情だけを切り離すわけにはいかないのである。語彙自身そうだし、そちらの方から論ぜざるを得ないことも多々ある。

はじめに呼称が適切かどうか疑問を挟みながらも一連の他動詞群の存在と意

義を示した。以下、しかるべきと考えられるので、一般的な社会的・日常生活、特に人間関係における心理状態を思い浮かべながら分析を進める。まずは結果として不快な感情をもたらす意の表現から始め、次に不快さを弱め快の方向をめざす、あるいは快をもたらす意の表現の分析へと移る²⁾。最後にいくつかの文法的な共通性を意味論的立場から述べてまとめる。

不 快

人間は感情の動物であると言われ、それぞれ思い入れや気持といったものを持っている。自分の意志で絶えず行動を取れば良いのだが、人間はまた、社会的動物でもあり、その安寧を保つことは至難の業である。

◀IRRITATE・ANGER▶ お互い仲良くやって行こうとして感情を損ねまいとするだろうし、また怒ってしまったら、その場しかり、極端な場合は人間関係もお仕舞ということになりかねない。それを考えただけでも決して怒ることを快しとしない人もいることが分かる。後味も良くないし、まったく無関係な人をも不快にさせる。自分と他者との関係において存在する価値感とか自尊心などがからむか。これがあるから社会生活は厄介であり、また安定しているのかもしれない。

怒りにも色々あるが、当の相手が何も感じなければ意味がないので、凡そ無生物に対して怒ることはないだろう。自分に対して怒ることは希にはあるか。一般的には強者の行動であって許容量の問題であったりもする。

以下述べる他の不快な感情はどれも内向的であるが、これは外向的で、かなりのエネルギーを必要とする。物を言わなければストレスが溜るし、言わなければ相手には分からないかもしれない。更に、言っても分かってもらえないかもしれない。そこで弱者が強者に対して怒ることは重要である。

怒りは泣くことと同様に激情の発露であるとも考えられる。後者の方が降参の度合が強く、同情が集まるけれど、前者に関しては意見が分れる。まだ元気が残っていると考えられたり、逆作用で相手を怒らせ争いになるかもしれない。しかし感情表現としては悲痛な叫びなのであり、なだめるよりもなぐさめる必要があるのかもしれない。

感情に触れ、気分を害するのが OFFEND である。自尊心にかかわる失礼なことに関して AFFRONT が適用される。不愉快な気持ちにさせられるのが DISPLEASE である。

刺激がさほど強くないのか、自制心があってなのか、すぐに怒りはしない。

過渡的状況で、いらいらさせるのが IRRITATE で広い意味をもつ。怒る気持ちを強く突き上げるのが PROVOKE で、針か刺でチクチク刺すように募らせるのが NETTLE で、もう抑えが利かないほど爆発寸前なのが EXASPERATE であり、順次程度が高くなると考えて良い。

ついに勘忍袋の緒が切れて³⁾ 表情や行動に現われるのが ANGER で最も一般的な表現であろう。こちらも順次程度が強まるが、まずは INCENSE が、次に ENRAGE が挙げられる。さらに軽い意味ももっているが裂火の如く INFURIATE がある。近づけないし、もうなだめられないかもしれない。同様な感じで怒り狂っての MADDEN がある。泣くほどには同情が集まらないかもしれないが、真底からの怒りの爆発ならば、あとはかえってさっぱりするだろうか。

《PUZZLE・CONFUSE》 怒りを抑えるのが理性ということになるだろうか。人間は理性的動物であるともいわれる。どうしてなのだろうかと考えるのもこれか。

人々はそれなりに人間関係を含め物事を理解しながら生活しているのだが、理解を越えることが起きたらどうなるだろうか。何も知らなければ、それはそれで良いのだが、なまじ僅かばかりの知恵があるお蔭で、それを絶えず納得させておかなければいけない。厄介なことになる。精神的に不安で落つかないし、極端な場合は怒ったり、恐怖感さえ加わるかもしれない。

物事順調な折には余り思考は働かない。何でそうなったか理解しきれない意のより一般的表現は PUZZLE で、さらに問題が複雑なので、ハタと思考が止まって、困ってしまうのが PIERPLEX である。当惑の度合がより強いと解釈してよいか。

一方、心理的に混乱させられ思考に影響すれば CONFUSE となる。さらに強く当惑させられ、理性にも響けば CONFOUND で、さらに強く混乱させられ理性的に考えることも出来ないし、表情にも現われるほどなら BEWILDER ということになる。

ここで言及すべきかどうか疑問視されるが、人目を気にして心理的に動揺させられるならば EMBARRASS となるか。また考えることによって心の穏やかさが動揺させられるのなら DISCONCERT である。DISTRACT は心理的動揺で、注意力・思考力が散漫になることである。以上に関して頓座したことを強調すれば BAFFLE ということになるか。

これらは状況が急変する、あるいは突然であるが故ということもある。凡そ

日常生活は、無意識ではあるが会話を含め茶飯事に関しても浅はかな知識なりに予測をしながらなのである。好奇心を満足させる程度のことならば良いが、予測しないことばかりが起きるなら、緊張の連続で神経が参ってしまう。

《SURPRISE・SHOCK》 予測に反したことが突然起きて驚いていることを強調した表現もある。心理的・肉体的順応性の崩壊である。最も広い意味に適用されるのが SURPRISE である。ドキッとしても実は快いことが起きていることもあるだろう。瞬間的反應で時間と共にその感情は薄らぐ。一瞬、感情も思考も、つまり精神的活動が停止すると大げさに考えれば理解し易いか。

程度が徐々に強くなるのだが今のことが信じられない ASTONISH とか、更に理解しようとしてもしきれず、困惑・動揺することになる AMAZE がある。さらに思考を起えて肉体的にまで影響し、ハッとすると ASTOUND となる。ビックリして身動き出来ない状態を強調すれば PARALYZE である。

以上、予想外の衝撃が表面的でなく、強く深く凝縮されて続く場合も含むが、特にそれを強調すると、一般的には SHOCK で、幅広く使用される。STARTLE はより強い衝撃であつてふためくことであり、STUN は茫然自失といった何も考えられない状態をいう。

予測していない上に突然なので、それだけでも不快なのに、直感的に危険を感じることもある。いわゆる本能的であつたり、あるいは想像力に依つたりするが、そのために警戒心や注意力を喚起することになる。生き物としての survival にとっては最も重要な感情であろう。

《FRIGHTEN・ALARM》 理解しきれない事物や、予測不能の事物は不安感を抱かせ、恐怖感にまで及ぶこともある。既にそのような意味を含む表現を見い出せるが、そのことを強調した表現もある。

突然の恐怖に関して最も一般的表現になるだろうか、FRIGHTEN が挙げられる。よりくだけた表現としての SCARE もほぼ同義といわれる。非常に強い恐怖感を抱かせるのが TERRIFY であり、どちらかといえば嫌悪感からの気持の方が強いのが HORRIFY である。瞬間的であるが少し思考というか、想像力が加わった感じがする。

それとの関連において、前触れとして危険が近いことを感じさせるのが ALARM である。そこで意気が挫かれることになると DISMAY となり、やはり前進を鈍らせることで近い意味をもっているのが DAUNT である。当惑することが強調され、とどこおつてしまえば APPAL(L)となる。こちら辺りになると不安感といった方が適切か。

外界からの刺激による感情といっても、その動作主にどちらかといえば強調がおかれるので、本稿では言及しない方がよいのではないかとも思えるものもある。つまり弱味を突いてこの感情を抱かせるのが INTIMIDATE であり、THREATEN や、それよりも強力な MENACE も挙げられる。怖い思いをさせられても、気の強い人ならば怒るであろう。気の弱い人なら泣いてしまう。緊張の発露がなかったならどうなるだろうか。

《UPSET・TROUBLE・DISTRESS》 各人、自分の意志通りに生活していても絶えず順調には運ばない。以上のように感情を害されたり、理性や思考が乱されたり、恐い思いをさせられたりする。その順調さを阻止する意で一般的に広く使われているのが UPSET である。特に穏やかな落ついた状態が破られると DISCOMPOSE であり、その他、その気で行動している場合も含めると DISTURB となり、さらに激しく感情に触れると PERTURB となるか。以上表面的な一時的な破綻であると考えられるが精神的動揺が加わると AGITATE となり内向していく。以下順次、ジワジワと影響が延び深まっていく。

怒りまでは到達しないが、不愉快度が増していらつくと ANNOY ということになる。本当に怒り出しかねない状況となると VEX へと苦悩の度合が進む。わざわざ何故などと考えると当惑や懸念・不安感などが入交る。つまり知的な要素が加わって影響は延びる。

そのつながりとしては程度の軽い BOTHER がまず挙げられよう。悩みに関して軽いこともあるが、広い範囲の意味をもっているのが WORRY で、悩みが募る感じが HARASS といえるか。恐らく TROUBLE が総括的な表現といえるだろう。肉体的影響も出てくるか。

まだ耐えられる状況であろうが悲痛・悲嘆といった感じさえ漂い始めると DISTRESS となる。精神的だけでなく肉体的にも苦悩・苦痛が満ちてくると、少し古い表現だが PAIN が見出される。

さらに AFFLICT も同様な意味をもつ。これらの感情は拷問に掛けられているかの如く感じられるかもしれない。一般的には TORMENT が適用されるが、具体性を強調した表現としては TORTURE があり、さらに責め方まで連想させる RACK もある。

そこではもう精神的だけでなく肉体的にも傷ついてしまっているように思える。より具体的意味で使われる INJURE があり HURT がある。HARM やさらに DAMAGE は広い意味に使われる。IMPAIR は徐々に募っていくことを表わす。傷ついてしまったならばどうしたら良いのであろうか。

《BORE・DISGUST》 人々はそれぞれ理想や希望・夢などをもって生活している。目標がないとやっていけない人もいる。しかしながら、いつも落胆させられて DISAPPOINT ということになるとうねり不満が募り、失望したりで FRUSTRATE となる。

努力にもかかわらず何度も同じことが繰返されれば自信や、やる気さえもなくしてしまふだろう。DISCOURAGE, DISHEARTEN, DISPIRIT などが思い浮ぶ。DEPRESS や DEJECT になれば更に悲しさも加わり、意気消沈して暗い感じが漂う。ついには本当に悲しくなって SADDEN となる。深刻だが泣いて済むならそうさせたい。

当然のことに精神的・肉体的疲労が溜ることになる。まずは TIRE が、そして FATIGUE や、さらに EXHAUST と程度が高くなる表現が思い浮ぶ。WEARY は募る感じがする。

疲労感や虚脱感でもううんざりである。BORE が思い浮ぶ。興味もなくなり、まさに DISGUST という表現が当てはまる。嫌悪感をもつことになるのである。REPEL や REVOLT も同意として使われる。しかし失敗を恐れて何もしなければ、やはり退屈で、同様な経過を辿ることになる。

快

一般的にいつて不快なことを敢えて求める人はいないだろう。昔のヨーロッパの貴族が食欲を満足させるために、満腹になると食べた物を戻し食べ続けたと聞くが特殊なことであろう。しかし、ある程度耐えることは必要だろう。その人に忍耐力や優しさや、更に知力さえももたらすかもしれない。何もしないで楽をしたがって何も得られないかもしれない。

不快な感情ばかり示してきたが、当然人間関係においても外界から快の方向へ作用する刺激もある。鈍感な人は別としても陽気で明るい楽道家は多分、気分転換の上手な人のことであり、不快な感情へは誰でもすぐに陥ってしまう受動性があるように思える。快の方向へは能動性というか、かなりの努力や積極性が必要とされる。自主性が求められるといった方が良いか。精神的にも肉体的にも行動を広くしておく必要がある。まずは肉体的健康からといえる。健康ならば充電できる。

《RELIEVE・RELAX》 何よりも耐えられれば良いのだが、耐えられないほどならばその最悪の状態から順次、常態に戻すことが先決となる。たとえば精神的・肉体的に負った傷や苦悩・苦痛はいやす必要がある。SOOTHE,

MITIGATE, LIGHTEN さらに ALLEVIATE, ASSUAGE, ALLAY などが挙げられる。

そこまでひどくなくても怒りや悲しみなどの激しい緊張感や不安感・恐怖感 はなだめ、弱められなければなるまい。CALM, QUIET, SOFTEN など、さらに PACIFY, MOLLIFY などが挙げられる。

更に、なぐさめ穏やかにした上、楽な気持ちにまでもっていく必要がある。CONSOLE, SOLACE, PLACATE のほか RELIEVE, RELAX, EASE などが思い浮ぶ。どれもまだ不快さを漂わせるが COMFORT となると少し明るい方向が見えてくる。この段階ならもう、あとはどうするか、自主的選択に委ねることができるだろう。

《ENCOURAGE・STIMURATE》一度や二度の落胆や、少し位の疲労なら、一気に元気つけることもできる。ENCOURAGE, HEARTEH, INSPIRE などが思い浮ぶ。沈滞ムードは一掃して、活性化することができる。ANIMATE, ACTIVATE, STIMURATE, INVIGORATE さらに VITALIZE, QUICKEN などが挙げられる。活発になるだけでも十分快いことである。肉体的に言えば運動を少ししたような感じであろうか。高揚され鼓舞されることになる。

生氣潑刺・意気軒昂といった感じで EXHILARATE, ENLIVEN なども挙げられる。具体的に色々な感情や気持ちを活気づけることになると INCITE, EXCITE, STIR などが思い浮ぶ。余り宜しくない感情を刺激することにもなるかもしれないが、元気になることでは快の仲間としてここで言及してよいだろう。そうなるとまた逆戻りして、なだめたり、落つけなければいけない場合も出てくるかもしれない。そのつながりとして、ついでながら、その意味で満足させる意の APPEASE をここに追記しておく。

《AMUSE・PLEASE》穏やかな楽な状態に戻って、選択が自主性に委ねられる段階においては、その状態を持続させる方向に努力が払われても良いだろう。強いられないことだけでも快いが、一時的退屈しのぎに愉快にやることはどうだろうか。AMUSE が広い意味をもっている。緊張や不本意なことから気持ちを逸して愉快にやる DIVERT もあるし、どちらかといえば知的なもので、前もって準備して行なう ENTERTAIN もある。さらに明るく愉快に陽気に元気よくさせる CHEER, GLADDEN もついでながらここに言及してよいだろう。

それよりも、もっと凝縮させた感じで喜ばすことも考えられる。軽く陽気にすることも含め、広い意味をもった PLEASE が代表的に挙げられる。より強

い程度には DELIGHT がある。REJOICE, REGALE は陽気に楽しむといった感じで、大きな喜びを表わす。GRATIFY になると満足ゆくほどに、と程度が高まる。

満足するかどうかを話題にすると SATISFY が挙げられる。恐らくあることに関してであろう。単なる喜びを表わす場合もあるが、また新たな満足を求めていくのが常である。手の届く範囲のものであっても、ひとつが成就すると、もうひとつということで欲望は果しないと言われることになる。ところがひとつ間違えば落胆して既述したような状況に陥ってしまうことになる。CONTENT も同様な意味をもつが望み通りでなくても満足する、つまり不満を抱かないことで、まったくの心理的自主性が重視される。なかなか悟ることはできないことだ。

前者が結果重視で後者が過程重視と言い換えられるかもしれない。健康状態が回復していくときの幸福感を思い浮べてみるのが良い。悲しいかな、不快があって初めて快なのであり、強い快を感じることでだけが快なのではない。不快の低位範囲は多様性に富むが快の方は非常に単純なように思われる。本稿の快と不快の分類はそれを反映しており納得がいく。受身では快のほとんどの低位範囲も容易には得られない。行動的・自主的であることが必要であろう。さらに視点を変えれば、そのことつまり他律的でなく自律的であることだけでも十分快であることだと解釈されよう。

《INTEREST・ATTRACT》ところで余りに傷ついてしまって簡単にはいやせない場合や、そのために無感覚になったり、やる気さえ失ってしまった場合はどうしたらよいだろうか。仕方ないが、恐らく時間に委ねるしかないだろう。そのうち退屈を感じるようになるかもしれない。そうなればもう回復の途上にあるといえる。健康な精神と肉体を得れば、新たにもう一度出直せる。

前のことは忘れて、いわゆる白紙状態で再出発することになる。以前停滞していたことを連想させるが RENEW を代表として元に戻す意の RENOVATE, RESTORE, REVIVE などが挙げられる。日常的にも腐った精神は絶えず REFRESH する必要がある。ある意味で不活発な状態は眠っていたことに譬えることができるので AWAKE(N), WAKE(N), AROUSE, ROUSE もここで適用されえる。白紙状態に戻すという静的な感じではなくて、もう活気があり動的な感じがするかもしれない。

このような状態になれば、素直に新鮮に感動することが出来るようになるだろう。IMPRESS, AFFECT, TOUCH, MOVE などの表現にも呼応できる。

やる気を全々失った人でもこのような状態であればまだ十分健全であるといえる。ここで STRIKE を追記してよいか。

そして興味や関心の芽も噴いてくる。健康と感動する心と好奇心が失われなければ、退屈などということは決してない。すぐに INTEREST が、つづいて INTRIGUE が挙げられよう。さらに心に対する訴えかけにも呼応できるようになる。広い意味をもった ATTRACT が挙げられる。CHARM, ENCHANT は魔力的な、FASCINATE はもっと強く心を捕え引付けることである。CAPTIVATE は軽い感じで捕えることを意味する。どれも別に男女関係を連想するには及ばない。塞いでいる状態では、このようなことには対応できまい。それなりの心理的状态が必要なのである。感動したり魅了されることで、逆に新鮮な気持ちになれることもあるかもしれない。

「何か良いことないかなあ？」などという受身的発言では退屈を打破しえない。楽しいことばかりも続かない。悲しいかな、続いたとしても恐らく慣れというのがあって飽きてしまうだろう。不難なだけで十分なのであるが平生の折には気付かない。人間は厄介なものだ。健康であることは言うまでもないが、上記のように、いつも新鮮で、ときどき感動があり、好奇心も満足させてくれるような生活はどうであろうか。しかし興味のあることだけにしか注意を向けられないということになるとこれまた厄介なことだ⁵⁾。

ま と め

今迄の記述で、一連の他動詞を対象としての分析が名詞あるいは形容詞の分析におけるような、ある一部の心理的状态の意味場の構造分析になっていると言えるだろうか。

意味論的にはかなりまとまった分野であることが分ったが、別の観点から、つまり文法的にもかなりまとまった分野であることも、ここで示さざるを得ない。形式上のことは歴史的なことからむので、本稿のような立場の意味論においては、一般的には一線を画すべきなのだが、この意味場に関しては認識的にも重要な意義をもってると考えられるのである。一連の他動詞を選択したことの妥当性が説明されえるか。

その前に、この他動詞群を明確にするため、近接するであろう LOVE・LIKE さらに HATE・DISLIKE などを中心とする意味場と対照させることにする。結論的にいえば、外界からの刺激に左右される、といっても本人の感受性や想像力、知識等によって異なる主観的なものなのだが、いわば他律的な感情と、

外界の刺激によって形成されるのであろうが自主的な感情とがかかわっており、両者はこの点でまったく異なる⁹⁾。

好き・嫌いの感情で取った行動でなくても、その結果として、本稿の扱っている感情を相手に抱かせ、こちらに対して好き・嫌いの感情をもつこともあるし、好き・嫌いで本稿が扱っている感情を抱かせる行動を取る、あるいは取ったと考えられることもある。両者には因果関係があり、表・裏とはいわないまでも背・腹の関係にあると解釈してもよいかもしれない。

両者の違いを更に理解し易いように、人間関係だけに絞って考えてみよう。該当する他動詞に関して連想するのは、その動詞にかかわる行為主の感情か、それとも行為が及んだ相手の感情か、どちらという問題なのである。後者の方はこちらの意志・感情が重要で、相手はいつでもよいのであり、前者はその逆で、行為者には関係なく相手がどう感じるかが重要なのである⁷⁾。

これが両者の大きな違いであり、前者はあの特徴ある統語論的变化を展開させることになる。該当動詞からの連想で意識される対象人物を文章において素直に前面に出せば、いわゆる受身構文を使わざるを得ないということである。他の他動詞の受身構文とは異なり、それが通常の、自然な文章構造なのである⁸⁾。

さらに単なる受身構文に終らないのがこの分野の他動詞である。意味的には自動詞の同型構文と同じ、つまり状態あるいは完了の意味があると解釈されるだろう。

一般的に受動態は *by* を従がえて行為主を表わすが、当然そのような場合もあるが、その他の前置詞 *with*, *at*, *of* など従がえるのである⁹⁾。*by* は直接的、その他は間接的であるとニュアンスの違いは説明されるが、どちらかといえばこの構文における過去分詞は形容詞の趣をもつと解釈されることも多い。

辞書の大小にも依るが、過去分詞が形容詞として別個に記される場合もあり、極端な場合は、他動詞としての記載がなく、過去分詞のみが形容詞として記載されている場合もある¹⁰⁾。使用頻度の多いものは、他動詞と過去分詞が共に記載されていることはいうまでもない。

いまさら確認することはないが、これらの動詞の目的語は辞書的表現を借りれば *someone* が多いことはいうまでもない。それが本稿における中心的意味でもあるが、具体的精神状態そのものであることもある。そのような事例が多いものは本稿のかかわる意味場では周辺的であると判断する糸口となるか。

もうひとつ特殊であると指摘してよい文構造がある。目的語が *someone* で

はなくて oneself を従がえた再起動詞的構文である。これは特に快に属する表現に優越する。目的語の問題ではなくて意味の問題である。快の表現に関しては自主性が重んじられることを何度となく述べたが、特に具体的に指摘したものに 대해서는当てはまる。自分で自分自身をある感情状態に至らしめると解釈されるが、意味論的なことと符合するのである。前置詞としては with などが多いかもしれない。これが受身形となると oneself は消えて、表面的には今述べた受身構文と同じになる。

過去分詞が形容詞として確固たる位置をもつ場合があることを確認の上、現在分詞も同様に扱われることを付加しておく。両分詞とも形容詞相当語句とみなされるのは一般的なことで、前者は受動的、後者は能動的意味をもっているが、このような扱いを受けるのは、やはり特別なことであると考えてよいだろう。

形容詞としては多くがこの形を取るが、他にいわゆる形容詞を形成する接尾辞をつけたものもある。どれも動詞との対応が明確である。名詞に関しても、ほぼ同じようなことがいえる。もっとも名詞と動詞、形容詞と動詞が同形であるものもいくつかあり、動詞よりも名詞や形容詞の方が優先するのではないかとと思われる表現もある¹¹⁾。

更に副詞は形容詞に規則的に -ly を付加することで存在しえる。意味的には文全体にかかることが多く、仮主語を立てて形容詞をもって来る構文と同意であったりする。

以上が本稿が対象とした他動詞群の文法的概要である。特記するに値するものではないだろうか。いくつかのことが意味論的なことに起因し、意味論的にも重要であると指摘したい。

意味論的共通性は、文章構造上でも共通性を有することが多々あるのだが、一般的には文章構造上から意味論分析に入るのは問題がある。方法論として組込む必要性はあるかもしれないが十分ということにはならないというのが目下の結論であろう。意味論的なことと文法論的なこととは、わきまえるべきであるのはいうまでもない。

しかし本稿に関してはかなりの対応性を見逃すことはできない。本稿の分析は一連の他動詞を対象にしたがら一連の状況を構造分析したと主張したいが、それでよかったのだろうか。一連の他動詞分析をそれだけに止どめたくない、止どまらないという意図が理解されただろうか¹²⁾。以上でまとめとしたい。

当初想像していた以上に構造があることが分かった。重要な表現には多くの

言及をしたかったが放えてどれも一回だけに統一した¹³⁾。羅列に終わった部分もある。単語数は快の方が思ったよりも多くなったが意味的には不快の方が中心のであろう。対立語の関係¹⁴⁾や下位範疇同士での平行関係はそれとなく記したが繁雑になるだけなので取りざたしなかった。

説明の順序は重要な順ではない。意味的に近いものを並べていった。相互に孤立しているわけではなく、むしろ重複する部分の方がかえって多い場合もある。それぞれ意味範囲が広く、強調する側面を変えれば別の下位範疇へすぐに移行しかねない場合もある。

難解さ故に短絡的説明になってしまって展開が苦しい部分もある。単純化しすぎや独断的な箇所もあろう。それでも本稿の概略的構造分析という主旨からは十分目的は達せたとと思われる。未熟な部分はまたの機会に補足・補強したい。

注

- 1) いくつかの辞書からの感想である。ついでながら本稿の分析にあたり特に参考にしたものを略記する。

Webster's Dictionary of Synonyms
 Modern Guide to Synonyms and Related Words
 Crabb's English Synonyms
 Longman Lexicon of Contemporary English
 Roget's Thesaurus (Penguin)

- 2) 不快を6に、快を4に下位分類した。便宜的に代表的表現をふたつまで、一箇所は更にひとつ加え< >内を選んだ。
- 3) 雨をポイントにし、雲行き、風、雨量、雷などを装飾しての天候による比喩的説明はどうか。
- 4) CURE, HEAL, REMEDY などの表現をここで言及してもよいか。
- 5) 別に『幸福論』を述べるつもりはない。
- 6) いくつかは使役の意を含まない他動詞として機能する場合もあるが不問に付す。
- 7) 行為者と相手と呼応しあう場合があることはいうまでもない。
- 8) あくまでも一般論であって詳細は個々に異なる。
- 9) to 不定詞を従がえて原因や理由を示すこともある。
- 10) 辞書をひとりの信頼度の高い informant として考えることに問題はないか。
- 11) 語構成は歴史的な事になるか。本稿では歴史的前後は考えない、あくまでも意味論的認識上の問題である。
- 12) 受身構文を分析したと言ってしまえばそれまでか。分析の単位は問題ないとして

も、それであぶれるものはないか。

ついでながら、いくつか気になる点を記しておく。他動詞を本源的であると考え、問題とした精神状態を「外的刺激による」と形容したが、文法論的立場から擁護されるか。受身構文は良しとしても形容詞としての認識や、辞書の類語比較において、下位範疇によって対象とする品詞の異同や、再帰動詞的構文を native はどう考えるだろうか。

音結合の類似は予想通りだが、単音節語が少ない。Zipf の法則の例外か、基礎的であるが難解と考えられるこの意味場に関する観察不足か。

日本語の味覚語彙調査において筆者が試用した快・不快の尺度を含む semantic-differential test を適用してみるのも一興か。

- 13) ついでながら注 2) を参照されたい。
- 14) dis- つきの否定語は記した以外にもある。重要性の問題もあり安易には記せない。ついでながら、たまたま目にした本であるが、本稿が対象としている語彙がけっこう見出されるので記しておく。

Colette Dowling : The Cinderella Complex 英宝社

縮小版であるが、原典はアメリカ (1981) で出版されている。